

## —日本における競走馬医療の現状 (I)—

## 連載を開始するにあたって

間 弘子<sup>†</sup> (特)日本中央競馬会競走馬総合研究所次長)

平成 26 年度における日本国内の馬の飼養頭数は約 8 万頭であり、用途別の内訳では 4 万 5 千頭あまりが軽種馬、すなわち競馬に関係している馬たちである。その他の大型動物の飼養頭数は、牛が 442 万頭、豚が 920 万頭であることからみても、日本における馬の数はきわめて少ない。その結果、競走馬に携わる獣医師の数は獣医師全体の約 1.3%、450 名程度である。日本国内の獣医師は約 4 万人弱、産業動物の獣医師医療に従事している獣医師は約 4 千名である。

競走馬に携わる獣医師が少ないことは、獣医師を生み出す教育にも影響している。すなわち、日本の獣医大学において馬を用いた実習ができる場所は限定されているのである。大学教育を底上げし、国際基準を満たす教育水準に引き上げることが目的として、国による取り組みが成され、連携大学の形態による大動物獣医医療に関する教育を、日本の 16 大学が共同でカリキュラムを作成・実践している。その一端を担う形で日本中央競馬会 (JRA) 競走馬総合研究所においては、各大学からの要請を受けて馬に関する講義、実習などのお手伝いを積極的に引き受けている。

競走馬総合研究所は、JRA の付属機関として昭和 34 年 (1959 年) に設立された、日本における唯一の馬専門の研究機関である。競走資源の確保と円滑な競馬の施行を図ることを目的とし、スポーツ科学、スポーツ障害

及び伝染病対応に関する研究を、その主眼としている。さまざまな研究成果は競走馬診療所、生産地、育成場などで応用され、活用されている。最近では、2007 年に 36 年ぶりに馬インフルエンザが発生したが、ワクチン接種や簡易キットを用いた早期診断の成果によって、流行を最小限に食い止め、競馬の中止は短期間にとどめることができた。また、競走からの引退を余儀なくされる疾患の一つである屈腱炎に対し、いち早く馬の幹細胞移植に取り組み、新しい治療技術の確立を目指して日夜研究を進めている。

厩戸皇子といわれた聖徳太子が残した“馬の耳に風”という格言がある。「心地よい春風の吹く中、愛馬にまたがって散策していた時、その気持ちのよさに愛馬はまどろむどころか、大切なご主人さまにもしものことがあってはと、油断なく周囲に気を配りつつ歩を進めていた」との意味をもつ。馬は、人間以上に多くの情報を収集している。情報の大切さを、表現した格言だ。ウマに関する情報、特に競走馬に関連する疾病に関して、多くの人に正確な情報を伝えることは、われわれの成すべき活動であろう。そこで、主要な馬疾病について連載記事として解説することにした。感染症をはじめとして獣医師として馬の疾病に関して知っておいてほしいものを中心に、競走馬総合研究所の職員が解説する。この連載が、わが国の馬を守る一助となれば、幸いである。

<sup>†</sup> 連絡責任者：間 弘子 (特)日本中央競馬会競走馬総合研究所)

〒 329-0412 下野市柴 1400-4 ☎ 0285-39-7093 FAX 0285-44-5676 E-mail : Hiroko\_Aida@jra.go.jp